

れる。十五巻本は、このような必須の作業からとり残されてきた。そのことは、本邦に傳わる十五巻本が完全に看過されている實情からも窺える。清朝の大藏書家陸心源が「十萬卷樓」藏本中に架藏していた一本がそれである。明治末年將來され今は靜嘉堂文庫に收められるこの本は惜しくも卷首を缺くが、見るべきところが多い。『祕史』諸本中に於ける位置づけを試みる所以である。

サン・ホセ信徒團反亂の意味世界

——フィリピン革命の思想的源流をめぐる一考察——

池 端 雪 浦

サン・ホセ信徒團と呼ばれるカトリック教徒の同胞團體が、ルソン島タヤバス地方で大規模な反亂を展開したのは、一八四一年十月のことだった。サン・ホセ信徒團は一八三二年頃マニラで設立され、一八四〇年頃、南タガログ三州に急速な勢いで浸透した、教會未公認の同胞團體であったが、その信仰内容は、きわめて正統的なものだった。しかし、スペイン當局は四十一年半ば、信徒團の組織規定がスペイン人とメステイソを除外していることを理由に、これを異端的であるとして解體命令を發し、同年十月下旬、實力による彈壓を開始した。そこで信徒團員は大舉してタヤバス州イサパンの野營地に結集し、果敢な武力抵抗をくり擴げた。

平穩な信仰活動を行っていた信徒團が、一夜にして武力抵抗集團に變じ、最後の「一兵にいたるまで徹底抗戦をくり擴げたその戰闘

力はどこから生じたのか。絶望的なまでの貧困、あるいは植民權力の抑壓體制といった外在的な説明は、この場合、客觀的に説得力をもたない。ここで重要なことは、信徒團が追求していた救済思想の内容を明らかにすることである。言いかえれば、反亂者たちが各々の心に思い描いていた反亂の意味世界を理解することである。本日の報告では、その點に關する一つの試論を提出したい。そして、ここで明らかにする反亂の意味世界が、實は、半世紀後に展開されるフィリピン革命において、西歐的變革思想と正統性を競い合う、土着的變革思想の源流でもあることを併せて指摘したい。

トルコ革命のひとこま

——エフ・エ・セイベキたちのこと——

永 田 雄 三

第一次世界大戰後、連合國によるトルコ分割の危機に直面して、トルコ人がこれに對する祖國解放運動を展開してこれに勝利し、またその結果、みずからオスマン帝國を滅亡させてトルコ共和國を樹立したことは、トルコ革命としてよく知られている。

トルコ革命の初期の段階において、ムスタファ・ケマルによる解放戦線の統一がまだ實現されないころ、イスタンブル市民や、西アナトリア、南東アナトリア方面の民衆はすでに、連合諸國軍に對して、ゲリラ的な仕方ですでに武力闘争に入っていた。これらの運動はバルチザン運動としてわが國にもすでに紹介されている。

これらのパルチザン運動の中で、西アナトリアにおけるそれは、しばしば、エフェあるいはゼイベキといった呼稱をもつ人びとによって指導されていた。これについても、すでに山内昌之氏によって、祖國解放運動における諸勢力の中で、非體制内分子という形で位置づけられ、運動におけるその役割が十分に明らかにされているが、これらの起源や西アナトリア社會における位置づけはまだ行なわれていない。

本報告では、十九世紀後半の西アナトリア社會におけるエフェ・ゼイベキの活動をとりあげ、その社會的位置づけを試みる。

餡茶・散茶・末茶・餅茶——製茶の歴史——

布 目 潮 風

現在世界で飲用されている茶をその製法から次のように四大別することができ。 (一) 綠茶、(a) 釜炒茶 (中國風)、(b) 蒸茶 (日本風、番茶、煎茶、玉露、碾茶)、 (二) 烏龍茶 (半醱酵、鐵觀音)、 (三) 紅茶 (醱酵茶)、 (四) 團茶 (磚茶、綠茶系、紅茶系)

一方において、唐代 (八世紀後半)、陸羽の『茶經』六之飲には、茶を分類して、

飲有餡茶・散茶・末茶・餅茶者。乃斫。乃熬。乃燂。乃舂。

とある。これは製茶された結果の製品の形状による命名と考えられる。餡は粗に通じ、餡はもつとも製法の簡單な葉茶、散茶は餡茶よりやや入念に製造した葉茶で、餡茶・散茶は番茶・煎茶の區別に比

定できよう。末茶 (わが國の沫茶である碾茶とは異なる) は搗鉢で搗るのと、木製の藥研で研るのと二通り考えられる。餅茶は陸羽の提唱する高級茶で、茶葉を蒸して杵臼で餅し、小さく丸めて乾燥した一種の團茶である。(これを飲む時は藥研にかけて粉碎する。)

本報告においては、『茶經』に見える前記四種の茶の製法から出發して、宋代の片茶と散茶、元代の茗茶・末茶・蠟茶とは何か。明代以來、葉茶が盛行し、團茶・末茶が行われなくなった事情、およびわが國で現在飲用されている沫茶の源流は以上の内何處に求めたらいいか等について卑見を開陳したい。

明代の南京都察院について

間 野 潛 龍

中國における行政監察は、秦漢以來國家組織の中の重要な柱の一つであり、ながく御史臺の名で行われてきた。しかし明の太祖は胡惟庸の變以來大幅な行政組織の改變を行った中で、御史臺も新しい都察院體制にとりかえた。成祖以後國家の中心は北京に移ったが、南京における都察院も他の行政組織とともに残され、明末まで繼承された。今回その南京都察院について、具體的な資料にもとづき明代史の中にどのような役割を果たしたかを検討したい。